

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

アンコールの「水」を再生するために ～カンボジアの中学生が環境改善に挑戦～

IDCJは2014年11月から17年9月、三井物産環境基金から助成を受けて、現地NGOであるJST※の協力の下で、アンコールの「水」再生支援プロジェクトを実施した。プロジェクトの概要や成果は後述するとして、まずは、プロジェクトを通して得たカンボジアの自然環境に関する基本的な認識を共有したい。それは、水環境を含む自然環境の悪化には、人が出すゴミの蓄積が根本的要因の一つとしてあげられるということだ。身近な湖や川を題材に、自然環境に対する理解促進や改善に取り組んだ本プロジェクトでは、さまざまなアクターがさまざまな成果を生んだ一方で、その根底にはゴミ問題に対する共通認識があった。

カンボジアの世界遺産、アンコール遺跡群。そこでは、アンコール・ワット、アンコール・トムなどの遺跡が有名だ。しかしその周辺では、急激な観光化および、それに伴う生活環境の変化や人口増加により、水の汚染が深刻な問題となっている。

特に200種類以上の淡水魚が生息するトンレサップ湖は、「命の湖」とも呼ばれ、長らく地域の人々の生活を支えてきたが、近年は、漁獲量が激減している。多くの魚種がIUCN（国際自然保護連合）の定める絶滅危惧種となり、早急な対応が求められている。

そこで、本プロジェクトでは、アンコールクラウ村のバイヨン中学校の生徒が、「シムリアップ淡水魚研究所」の専門家から、水環境と生物に関する授業を受け、その後、JSTと学校の指導・協力の下で、①村の水辺調査、②水環境絵本図鑑の作製と普及、③中学生による地域小学校への出張授業、④ナマズなどの養殖、⑤トンレサップ湖でのゴミ拾いなどの活動を展開した。これらの活動を通して、同中学校の生徒たちはゴミの蓄積や放置の実態を目の当たりにし、それがもたらす自然環境への影響について理解を深めた。その上で、学校生活に改善活動を導入し、その知見を関係者に広めたのである。

例えば、中学生たちは毎日の学校内の清掃やゴミの分別はもち

ろんのこと、校庭に花を栽植し、世話するようになった。また、国家行事やスポーツイベントなどの後には、率先して会場のゴミ拾いを行うようになった。この自主的なゴミ拾い活動については、シムリアップ州教育省からも謝辞が述べられたという。さらに、彼らの活動は保護者や地域の住民たちにも影響を与えた。

例えば、可燃ゴミをまとめて燃やしたり、ペットボトルを利用して花を栽培する住民の姿が見られるようになった。また、中学生が出張授業に向いた小学校でも、ゴミ拾い、植えた木の世話



水辺の環境調査を行う子どもたち

など改善活動が強化されるようになった。バイヨン中学校の校長は、州の教員会合にて、生徒たちの取り組みを積極的に発表してきた。現在、バイヨン中学は環境教育の模範校として知られるようになり、教育関係機関などからの視察や交流も増えているという。これまで環境問題についてほとんど考えたことがない人々が、今や環境保全の重要性、環境と

生き物の関係について考え、行動するようになったのだ。

カンボジアの農村部は、観光化や都市化の波、それに伴う近代的な企業活動の浸透を受けて年々変貌している。その過程で、従来のやり方では処理できないゴミは放置され、溜まり続けてきた。それは環境を悪化させ、魚や農作物をはじめとする自然の恩恵を受けて生活をする人々にも悪影響を与える。農村部はさらに貧困化が進むことになる。「ゴミ問題を軽視しては、農村部の未来の発展はありえない」。本プロジェクトを通して、この視座を得たことが何よりも大きな成果であった。

最後に本稿は、JSTの現地活動報告書に基づき作成した。種々の活動実施を担っていただいたJSTの皆様、またプロジェクトに助成いただいた三井物産環境基金の関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

（※「アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構」(Joint Support Team for Angkor Preservation and Community Development)、<http://www.jst-cambodia.net> 参照）

（文責：国際開発センター 経済社会開発部研究員 板倉 一平）